

当署における国有林材販売に関する一考察

奈良井・経理課処分係 朝 日 正 夫
 事業課生産係 塚 本 勲
 “ 販売係 須 沢 清 二

はじめに

木材需要が停滞し、木材価格も低迷を続けているが、これは国民経済を背景に木材需要の大宗を占める住宅建設活動が不振を続けているためと言われている。

木材価格は、一般の需要動向によって左右されるが、商品としての木材は、樹種、品質、採材方法等の諸因子によってその材価に大きく影響する。

当署としても販売にあたっては、新鮮材の生産、需要に対応した採材方法、適切な品質管理、積積数量等に配慮して実施しているところであるが、特に販売数量、販売金額に占める割合が大きく、今後更に増加が見込まれる人工林ヒノキの販売業務をより適正に進めるために、過去の実績を分析検討したので発表する。

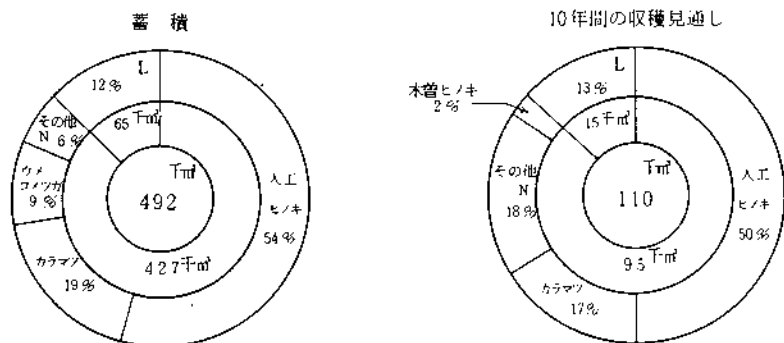
I 分 析

1. 当署における人工林ヒノキの占める割合

(1) 蓄積及び収穫見通し

第3次地域施業計画による施業団内の樹種別蓄積比率を見ると、「図-1」でも明らかかのとおり、人工林ヒノキが54%と非常に大きい比率を占めている。また、当面、今後10か年間に於ける収穫見通しについても、第4次地域施業計画では、人工林ヒノキは、「図-1」でも明らかかたとおり総収穫量の50%と大きな比率を占めている。

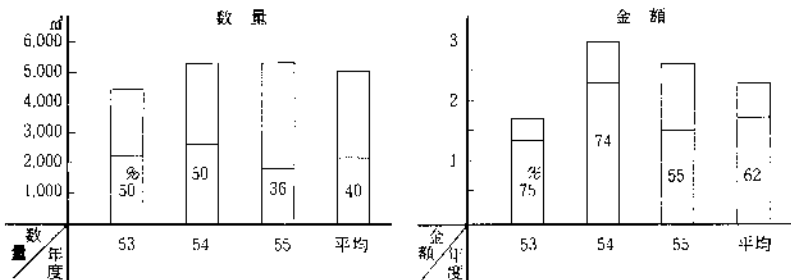
図-1 当署における人工林とヒノキの占める割合



② 販売実績

過去3か年間に於ける販売実績において人工林ヒノキの占める割合は、「図-2」でも明らかのとおり3か年平均では、材積で40%、販売額で62%と非常に大きい比率を占めるが、特に販売額に占める割合は大きい。それだけに人工林ヒノキの販売方法のあり方が当署における収入額におよぼす影響は誠に大きく、当署にとって重大な問題であるかがわかる。

図-2 販売実績に占める人工林ヒノキの割合



2. 人工林ヒノキ収穫林分の現況

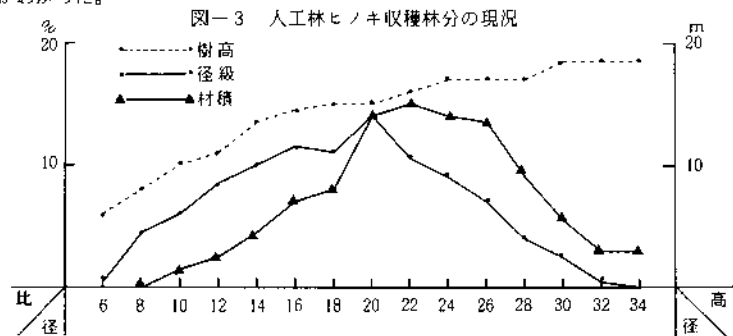
人工林ヒノキの林分管理はどうあるべきか。いろいろな考え方があがるが、一般的には、質のよい柱材をいかに多く生産するかにあると言われている。

そこで、現在収穫している人工林ヒノキ林分について、径級分布がどのようになっているのか、その比率はどのようになっているか、過去4か年間に於ける収穫林分の分析をしてみた。

その結果は、「図-3」のとおりである。

- (1) 径級幅が6cm~46cmと非常に広い。
- (2) 元玉柱適材としての16cm~22cmの割合が本数比で45%程度である。
- (3) 14cm以下の小径木が本数比で30%もある。

ことがわかった。



3. 人工林ヒノキの販売実績

人工林ヒノキ柱適材については3m採材が販売上有利であることは実績上わかっているが、どの程度有利であるのか、過去3か年間に於ける人工林ヒノキの公売実績を分析してみた。結果

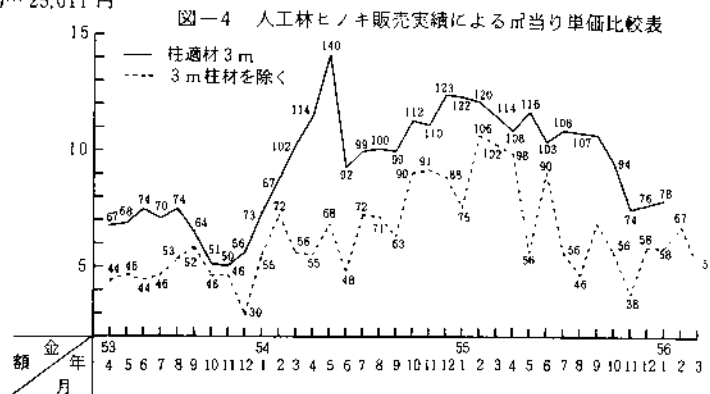
は、「図-4」のとおりであるが、

- (1) 市況の動向、販売材の品質割合等で異なるものの、柱適材については、3m採材が他の4m採材と比較して常に有利であることがわかった。

- (2) 有利性を金額 (㎡当り) で示すと、

53年度……………15,076 円
 54年度……………34,017 円
 55年度……………27,485 円
 3か年平均…25,011 円

有利である。



4. 人工林ヒノキ生産量に占める柱材生産の割合

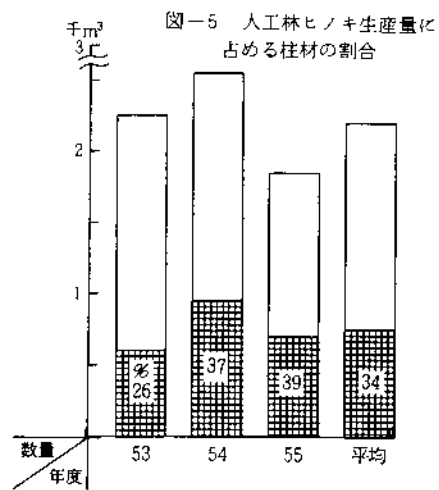
柱適材についての3m採材の有利性については、販売実績から明らかであるが、現実の収穫林分からいかに多くの柱材を採材するか、販売上大きな問題である。

当署においては、より多くの柱材を採材するために、

- (1) 昭和53年度に当署で開発した柱採材用固定尺の採用と活用
- (2) 柱材有利性に対する意識と技術の向上に努めた結果「図-5」のとおり、年々その割合が向上していることがわかった。

5. 新鮮材の生産

有利販売の上から新鮮材の生産は最も重要な問題であり、特に人工林ヒノキのように辺材部の鮮度が強く求められる樹種については、いかにして鮮度の高い材を生産するか大きな課題である。鮮度の高い材を生産するためには、伐倒から生産完了までの生産期間を短縮することが最も重要な因子であり、このため当署としても作業仕組の改善、集材作業に見合った先行伐倒に努力した



結果、「図-6」のとおり生産期間が大巾に短縮した。

図-6 伐倒から搬出までの期間調べ

年度	林班 番号	班級	工程	数量	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
53	100 11号線	い	全伐	510	20				18			20				
			集造材運				1				4					
	3号線	い	全伐	730			8				31					
集造材運			1					20			22					
54	13号線	い	全伐	990							23				25	
			集造材運												27	
54	82 7号線	い	全伐	1,250			31									
			集造材運				31									
55	1号線	い	全伐	2,950												
			集造材運				24			7						
56	3号線	い	全伐	760				5								
			集造材運						18							

II ま と め

1. 分析の結果をまとめてみると、

- (1) 人工林ヒノキは当署にとって大きな比率を占めており、今後も漸増する。
- (2) 人工林ヒノキの価格は、需要動向等によって変動はあるが、柱通寸材については、3m採材が有利である。
- (3) 昭和53年度、当署において研究開発した「採材固定尺」を使用すること等によって、柱材の生産割合が高くなった。
- (4) 新鮮材の供給については、生産期間が除々に短縮されている。
- (5) 人工林ヒノキ収獲林分の内容を分析すると、径級範囲が広く、柱通寸材の径級の割合は45%程度であり、また小径木が約30%も含まれている。

2. 今後の課題

(1) 柱材生産割合の向上

柱材の生産割合を更に向上させるため、現在実施している固定尺の使用、柱材有利性に対する認識と技術の向上を更に押し進めるとともに、今後は特に、元玉採材の工夫（根曲りの工夫、根張り付き伐倒）等をはかることにより、柱材生産割合の向上をはかる。

(2) 新鮮材の供給

ア、伐倒から貯木場搬入までの期間を更に短縮する。このために、未了材管理の適正化、集材作業と並行した伐倒時期の設定、集材方法の改善等を実施する必要がある。

イ、販売業務の改善

新鮮材の供給にとって生産期間の短縮とともに大切なことは、販売業務の改善である。

新鮮材が生産されても、契約あるいは買手が引取るまでに長期間を要するようでは新鮮材の供給とはなり得ない。このため現在の販売業務の改善が必要である。

そこで、小口極積と公売回数増、(署単位の公売実施)、品質管理の向上、(雨期における防虫対策、敷木、化粧直し)等の具体化が望まれる。

(3) 柱材生産のための林分管理

人工林ヒノキの生産目標は、良質の柱材をより多く生産することにあると思われるので、それぞれの現地の実情に対応した施業のあり方について、今後更に研究する必要がある。

お わ り に

人工林ヒノキが販売収入に占める割合は非常に大きい。今後のより良い販売方法のあり方を見出すため、過去の実績を分析検討し、その結果を発表したところであるが、今後更に改善に努力したいと考えている。

集材機ブレーキ操作（手動切替）について

藪原・味噌川製品事業所 巾崎 栄和
 " 古畑 今朝一
 " 小出 悦司
 " 藤原 誠

は じ め に

集材機による集材作業は、効率よく、かつ安全な施設を設置し、これを十分に生かした作業を行う必要がある。

私達の職場でも、能率性と安全性を考慮して、色々な架線方法が試みられており、単純なものから高度な架線方式と多種多様であり、集材機もまた年々開発され、複雑な架線にも十分に対応できるようになってきている。

この高性能な集材機を十分に生かして、安全に能率的に作業できるように、集材線下の作業排除に色々と工夫をしている所であるが、機械の持っている性能をフルに活用して実行しようとする、集材機のドラム3胴を同時に操作する必要がある。